分担研究
□川崎病の治療法に関する研究

原田　研介

〔Ⅰ〕 班研究

1. 免疫グロブリン療法の長期予後の追跡

過去に行われた免疫グロブリン療法における冠動脈障害の追跡を行った。詳細は、この報告に書かれているが，結果としては，１年後において，各治療群の間に差を認めなかった。しかしながら，免疫グロブリン，１００mg/kg/日連日５日投与においては傾向として，アスピリン単独投与よりも良好であるように思える結果が得られた。

2. 免疫グロブリン１００mg/kg/日連日５日投与と，４００mg/kg/日連日５日投与の比較。

この研究は現在まだ途中の段階である。昭和63年９月までに計１４７例の症例が集積された。60病日までの経過観察において，有意の差は認めていないが，４００mg/kg/日連日５日間投与群の方が良好であるような印象を得た。もうしばらく症例を集積する予定である。

〔Ⅱ〕 個別研究

不全型川崎病に冠動脈瘤を認めた症例が，児嶋らによって報告されている。川崎病は原因が明確にされていない現在，臨床症状によってのみ診断されているが，診断の手引きの項目に完全に合致しなくても川崎病である症例があることは否めない。不全型であっても一応心エコー検査を行って，冠動脈障害の有無を検索することが望ましい。

小川らはＡ－Ｃバイパス後の問題点を報告している。術後に進行性の狭窄を生じた症例である。小児のＡ－Ｃバイパスはまだ未経験の分野が多く，かつ長期予後も不明な点が多い。今後更に検討されるべき問題であろう。

学校検診における問題が清沢らによって報告されている。川崎病罹患児の医学的な究極の目標は，如何にして，正常な生活を行わせることができるかということである。これは単に医師だけの問題ではなく，家庭，学校での扱い方の問題も含んでいる。永遠の問題であろう。

ホールター心電図による不整脈の検討が多田羅らによって行われた。不整脈は正常児においても多く見られるものである。病的な不整脈であるかどうかを更に検討する必要があるであろう。

血漿１１－behydro TXB_2の測定について報告されているか，これは新しい試みである。まだ症例数が少なく不明確な点が残されているが，冠動脈瘤発生の早期予知になりうる可能性があり，注目される。

アポ蛋白の測定の報告がなされている。川崎病は長期的に見た場合，動脈硬化のリスクファクターになると言われている。そのような意味で，更に長期的な経過観察が望まれる。

川崎病の遠隔期における線容の検討が山田らに

日本大学医学部小児科

よって報告された。1年以上経過した症例では線容能が低下しているという。長期的な血管内皮細胞の障害を示唆しており，これは動脈硬化のリスクファクターとの関係において重要な問題であろう。

免疫グロブリン療法と免疫反応について，佐藤らが報告している。症例数が少なく結論はむずかしい。これは免疫病理班研究によって，更に検討されるであろう。

尾内らは家兎における実験的冠動脈炎について報告している。現在まで，冠動脈障害の動物モデルの作成についての報告は極めて限られたものである。この実験が確実に行われるならば，治療法の研究に大きな貢献となるであろう。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.免疫グロブリン療法の長期予後の追跡

過去に行われた免疫グロブリン療法における冠動脈障害の追跡を行った。詳細は、この報告に書かれているが,結果としては,1年後において,各治療群の間に差を認めなかった。しかしながら,免疫グロブリン,100㎎/kg/日連日5日投与においては傾向として,アスピリン単独投与よりも良好であるように思える結果が得られた。

2.免疫グロブリン100㎎/kg/日連日5日投与と,400㎎/Kg/日連日5日投与の比較。

この研究は現在まだ途中の段階である。昭和63年9月までに計147例の症例が集積された。60病日までの経過観察において,有意の差は認めていないが,400㎎/kg/日連日5日間投与群の方が良好であるような印象を得た。もうしばらく症例を集積する予定である。